

広めよう！地域でゴミゼロ大作戦
プロジェクト報告書

私たちは、ボランティアリーダーの一員として、そして大学コンソーシアム京都のインターンシップのプロジェクトメンバーとして5月から11月12日の成果報告会まで、約半年間に渡り、活動してきた。

始めに祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアリーダーとして、他のボランティアリーダーの方たちと行ってきた活動について報告する。

まずはリーダーレクチャー講習会である。これは2日間で行われた。前半は、5月14日、京エコロジーセンターで行われた。レクリエーション形式のレクチャーで他のリーダーと顔合わせと交流を行った。初対面の人ばかりで緊張していたが、アイスブレイクを通してすぐに打ち解けることができ、違う大学に通っている方や年齢問わず社会人の方とも接することができた。前半のアイスブレイクやコミュニケーション講習では相手にどう伝えるか、どう伝わるかを重点において取り組んだ。祇園祭当日はたくさんの観光客を相手に自分の伝えたいことをうまく伝えないといけないため、コミュニケーションの基礎を一から学ぶことができてよかったと思う。6月11日の後半のレクチャーではこの活動の目的やエコステーションの設置方法・分別回収の仕方まで祇園祭の活動について一通り学んだ。これらのレクチャーのおかげで当日までの不安を解消することができた。こういったボランティアリーダーの事前研修は今年初の試みと伺ったが、このレクチャーがあるのとないのでは、知識的な部分においても精神的な部分においても大きく変わってくるのではないかと感じた。

次は京都大作戦である。7月2、3日に祇園祭の現地練習を目的に京都大作戦のボランティア活動にボランティアリーダーとして参加した。京都大作戦とは、毎年7月に京都府宇治市の京都府立山城総合運動公園(太陽が丘)特設野外ステージにて開催される、野外ロック・フェスティバルである。企画者である10・FEETが「活動10周年の記念に何かしたい」ということで、いろいろ討論するうちに「野外イベントをしたい」と決まったのがきっかけであるようだ。また、環境に配慮した取組としてリユースカップを全面導入し、そもそもごみの出ないフェスづくりを進めると同時に、10・FEETの呼びかけで演奏終了後、多くのファンが散乱ごみを進んで拾った。そのため、毎年ほとんどごみが落ちていないフェスとして確立されているイベントである。

私たちはこの活動で、エコステーションの運営・ごみの分別の呼びかけ、一般ボランティアを担当エコステーションへの誘導・食器を各出店店舗への配送を行った。来場者に対するゴミの分別の呼びかけ方や一般ボランティアとの接し方など、祇園祭当日にむけて良い経験になったと思う。この活動に参加する一般ボランティアの方は京都大作戦のチケット抽選に落選した人が多いそうで、この活動は環境ボランティアをしながら、フェスに参加できるという付加価値が魅力的な活動である。環境問題・エコ活動に興味がない巻き込むことが難しい層をうまく取り込んでいると感じた。また、来場者のファンの方もごみをエコステーションで捨てる・ペットボトルのラベルをはがす等の分別が当たり前になっていて、イベント参加者全員が環境意識を高めあっている活動であると感じた。講習会を行っていたとはいえ、現場での実習は初めての体験だった。また、私たち5人はごみゼロ大作戦に参加した経験がなかったので、慣れないことも多く、精神的にも体力的にもきつい2日間になった。他のリーダーの中には、去年参加している方もいらっしまったので、そのような方達に教えてもらうなど、ボランティアリーダーみんなで協力し、声を掛け合い、お互いに思いやりを

もってこの2日間活動できたと思う。実際の現場実習を通して、ボランティアリーダー同士の信頼も深まった。そして何より、祇園祭当日の自分たちの役割や、本番での動き方、一般ボランティアへの接し方など、実践的なことをたくさん学ぶことができた。これは祇園祭本番にとっても生かすことができたと思う。祇園祭の前に、京都大作戦に参加することができてよかったと感じた。

本番前最後の活動は直前ミーティングである。これは祇園祭1週間前の7月9、10日に行われた。当日は京都市内の祇園祭が行われる現場近くで開催された。直前ミーティングでは実際にテントを立て、エコステーションを設置する。祇園祭本番ではボランティアリーダーが一般ボランティアに指示してエコステーションを設営することになるので、ゴミ箱の順番など入念に確認を行った。また、当日のエリアを歩いて下見をし、グループに分かれ、それぞれの担当エリアでの注意事項や周辺の施設を確認した。周辺施設の確認以外にも、道路規制で一方通行になる通りもあるので、祇園祭当日の人の流れもチェックも行った。ここでの最終確認をしたことによって、当日の動きがスムーズになったと思う。

そしていよいよ、祇園祭当日である。メインは、7月15、16日の宵々山、宵山での活動である。祇園祭当日のボランティアリーダーの仕事は大きく分けて三つある。一つ目はボランティアの誘導や活動サポートである。一般ボランティアを集合場所から各エコステーションに誘導、そしてエコステーションの運営についてなどの説明を行い、一般ボランティアの方が安心して活動できるようサポートするのが大きな役目である。また、一般ボランティアが初対面同士の場合は、ボランティアリーダーが中心となってコミュニケーションをとるなど、より楽しい活動になるように心掛けた。二つ目は祇園祭会場での情報伝達や調整である。活動中はボランティアリーダーにトランシーバーが渡され、それをういてエリアごとに連絡を取り合った。このトランシーバーは忙しいエコステーションへの応援や各エコステーションの状況の把握などに用いた。またエリアごとにリーダーがおり、そのリーダーからの指示もトランシーバーで行い、緊急時の対応もトランシーバーを通じて指示を受けた。地域住民の方からクレームをいただくこともあり、大変な場面も多くあったが、冷静に対応する難しさを強く感じた。祇園祭ごみゼロ大作戦自体が、今年で3年目になる新しい活動である。知名度は少しずつ上がってきているようだが、地域住民の方や屋台の出展者など、多くの方の理解を必要とする活動である。そのような面において、まだまだ課題の多い活動であると感じた。三つ目は祇園祭会場での観光客からの問い合わせ対応である。祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアのTシャツを着ていると祇園祭のスタッフだと観光客から間違われることが多いので、観光客にいろいろなことを質問されることが多くあった。代表的なものは、トイレ・喫煙所の場所、〇〇鉾・〇〇通りはどこですか、といった問い合わせであった。京都の地理や祇園祭の知識が必要とされ、自分自身勉強になることも多かった。

祇園祭は日本三大祭なだけあり、国内外問わずたくさんの観光客に溢れていた。そして、露店もたくさん出店していて、それに加えてコンビニエンスストアや通りに面している居酒屋なども飲食物を販売しており、大きな賑わいを見せていた。あまりの人の多さに驚いたが、京都大作戦の経験や直前ミーティングでの準備のおかげで落ち着いて対処することができた。想定外のトラブルや当日になっての急な変更など臨機応変な対応が求められることも多くあったが、ボランティアリーダー同士が協力しあい、乗り越えることができた。ここまで協力できたのも事前からの研修でお互い顔を合わせていたのが大きな要因だったと

感じる。祇園祭当日まで多くの研修をこなしてきましたが、何一つ無駄にすることなく、学んだことを活かすことができよかつたと思う。エコステーションでは分別を呼びかければほとんどの観光客は応じていて、ゴミ一つ一つを分別していた。また、リユース食器についてもきちんと回収することができた。エコステーションについて興味を持った方や感謝の言葉を言ってくれる方もいて、循環型社会の実現に向けての理解が少しずつ深まっていることを感じた。この祇園祭をモデルとして他の地域のお祭りやイベントに活かされていってほしいと強く思っている。

翌日の7月17日は、洗浄作業が行われた。洗浄作業では、祇園祭で実際に使われたリユース食器を洗って汚れを落とす。今年は立命館大学・京都大学の食堂をお借りして作業をした。洗う人、食器洗浄機にかける人、トレイに詰める人などのようにそれぞれが役割を分担し、流れ作業で行った。洗浄したリユース食器の量は二日間で使用した量全部だったので、とにかく膨大な量だった。これまではこの量が全部ゴミになっていることを考えるととても恐ろしいと感じた。私たちがやってきた活動がゴミ削減に大きく貢献していたと感じる瞬間でもあった。

その翌週には後祭が行われた。後祭は露店が出店しないので、各エコステーションで観光客に分別を呼びかけるのがメインの活動となった。前祭ほど観光客は訪れなかったので、観光客とコミュニケーションをとることができるなど、比較的落ち着いた活動になったと思う。前祭に比べて気持ち的にも余裕がうまれたおかげで一般ボランティアの方とも交流ができ、中身の濃い活動にすることができた。一般ボランティアの方から来年はボランティアリーダーをしてみたいという声もいただき嬉しく思った。

最後は振り返り会である。8月27日に行われた振り返り会では、ごみゼロ活動の成果のデータを全体で共有した。その後、祇園祭のごみゼロの活動がテレビで取り上げられた映像を鑑賞し、最後に参加者一人ずつが祇園祭当日の良かった点や改善点を発表し合った。自分たちがやってきたことが数字として出されることで、実感であったり結果のよし悪しであったり、プロジェクトとしての成果を知ることができた。また、一人ひとりの意見を聞き、活動を多角的に振り返る事ができたと思う。

以上が祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアリーダーとして私たちが行っていた活動である。

この活動を通じて、同じ世代の学生であったり、社会人であったり、ボランティア活動に積極的に参加されている年配の方であったりと、性別・年齢関わらず本当に多くの方に出会うことができた。また、祇園祭ごみゼロ大作戦に参加されている理由も人それぞれで、環境問題に興味のあり参加している人、授業の一環として参加している人、リーダーシップを養うために参加している人、別の祭でごみゼロ大作戦を始めたいと思っている人など、多くの理由があった。どの人にも共通していることが、自分なりの目的を持ち、本気で活動に参加しているということだ。私たちは、そのような方たちと出会い、多くの刺激をもらうことができた。自分たちの今までのごみに対する意識や、ごみゼロ大作戦に対する意識も変わった。祇園祭ごみゼロ大作戦を通して得たものは、本当に大きかつたと思う。

次は私たちが、ボランティアリーダーとしての活動以外に行っていた活動について報告していきたいと思う。

まずは、京都市の学区の夏祭りに参加をしたことである。祇園祭ごみゼロ大作戦のボラン

ティアリーダーとしての活動が落ち着いた7月下旬ごろから、8月下旬にかけて行った。ここでは、地元住民の方とエコステーションの運営を行った。捨てる人が分別しやすいようなゴミ箱の順番や呼びかけの仕方、エコステーションの撤収の工夫などを地元住民の方に伝えることができた。私たち自身も祇園祭を経験しているおかげなのか、自信をもって取り組むことができたと思う。祇園祭で培った経験を地元住民の方に還元することができて良かったと感じた。

また、子供達を対象とした自家発電体験コーナーの運営の補助も行った。手回し発電機や自転車発電を通じて、子供たち自身に身をもって電気の大切さを感じてもらうことができた。学校の授業のような座学では飽きてしまう小学生や中学生も遊園地のアトラクションのように楽しみながら発電を体験しているのを見ると、言葉で伝えるよりも体で覚えてもらうのも伝える方法の効果的な手段だと思う。

祇園祭は大々的に活動を行ったため大変インパクトが大きく、たくさんの人にリユース食器の存在を知ってもらい、効率よく環境意識を働きかけることができたと思う。地域の夏祭りではアピールできる対象の数は減ってしまうが、リユース食器を使用することが当たり前のような認識を与えることができると感じた。地域の夏祭りでは、地域社会から環境意識を根付かせていくことの重要性を感じた。祇園祭・地域の夏祭りの対照的なアプローチを体験でき、とてもいい機会になったと思う。このように小さな規模の祭から、少しずつ住民のごみへの意識を変えていくことで、循環型社会の実現に近づくのではないかということを強く実感した。

祇園祭ごみゼロ大作戦や地域の祭での活動を経て、私たちはインターン生という立場を利用して、来年のごみゼロ活動の質を向上させることができるのではないかということを感じた。そこで考えたのが活動報告書の作成、申し送りの作成、ムービーの作成である。

まずは活動報告書の作成についてである。私達自身の活動の成果として祇園祭ごみゼロ大作戦での活動の内容をまとめた活動報告書を作成した。自分たち自身がボランティアリーダーをしていた時にどういった流れで祇園祭当日を迎えるのか、ごみゼロ大作戦活動のために何をすればよいか、活動中に注意すべきことなど、わからないことが多すぎて不安が大きかったという感想があった。来年以降にボランティアリーダーをする人の不安を少しでも取り除いてあげたいという思いを込めて作成したものである。作成した報告書は来年のボランティアリーダーの説明会で配布されることを念頭に置き、ボランティアリーダーとしての経験談やアドバイスを重点に内容を構成した。見やすくするために文字の大きさやフォント、デザイン等を調整するのがとても苦労した。記載している内容には今年のボランティアリーダーが来年のボランティアリーダーに対しての一言を載せるなどメッセージ性の強いものが多く、祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティア募集のパンフレットの内容とは差別化を図っている。この活動報告書が来年のボランティアリーダーにとってバイブルとなり、不安なく活動に専念してほしいと考えている。

次は申し送り書の作成である。ボランティアリーダーから8月27日に行われた振り返り会においてアンケートをとり、回収・分析を行った。これを祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会に対して改善案として提出する予定である。作成に至った理由としては、祇園祭ごみゼロ大作戦は始まって3年経つが、活動後の申し送り書のようなものが今まで作成されていなかったからである。ボランティアリーダーが実際に体験して感じたことを来年に引き継

ぐために、私たちインターン生が代表して作成させていただいた。ボランティアリーダー目線でこの活動がどうしてもっと良い活動になるのかを回収したアンケートを基に考えていった。回収したアンケートの内容を見て感じたことは、同じ活動をしながら感じることは人それぞれということである。色々な視点からこの活動を捉えていて、自分にはない視点から見えた意見はとてもおもしろかった。感じることは違えども、この活動をもっと良い活動にしたいという思いは共通していたと感じた。大変だったことはアンケートが最初の告知で思うように集まらなかったことである。インターン生それぞれの人脈を駆使して集めることができたが、事前のリスクヘッジができていなかったこと、また私たち自身もみんな回答してくれるだろうという甘い考えがあったと思う。このことは大きな反省点であると捉えている。だが、一回きりの活動で完結しないためにも、活動した人々からの生の声を実行委員会に届けることは大きな意味があったと思っている。ぜひ来年の活動に私たちの集めた声を生かしてほしい。

最後がムービー作成である。祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアリーダーの活動にフォーカスして、リーダーのレクチャー講習会から、宵山までの活動の写真を使用し、スライドショー形式で、1分半弱のムービーを作成した。こちらは来年の祇園祭ごみゼロ大作戦ボランティアリーダーの募集説明会で流していただくことを念頭において作成している。対象は、ボランティアリーダーとして参加してみたいと考える大学生である。公式な映像や、資料などはもともとあるため、よりシンプルに活動の楽しさ、雰囲気伝えるツールとして使用していきたいと考えている。

以上が私たちの半年間の活動での記録と成果である。

これら以外にも私たちが、実現することはできなかったが、案出し、企画を行ったものが2つある。

1つ目は、SNSの運用である。私たちはFacebook、Twitterの2つでアカウントを作成し、自分たちの活動の様子や、環境に関する話題を同じ世代の大学生に向けて発信していこうと考えていた。実際Twitterの方はアカウントを作成するところまで進めることができた。だが、祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアリーダーとしての活動中は、活動自体に必死だったこともあり、写真を撮り、アウトプットするという余裕がなかった。また、発信していく具体的内容や、担当者、どのようにフォロワーを獲得していくのか、などをきちんとメンバー内で話し合うことなく、目的を共有せずにアカウントだけを作成してしまい、方向性を誰も理解することがないまま、活動終了の11月まで来てしまった。これらはメンバー全員が深く反省している。今後の方向性としては、来年のインターン生に引き継ぎ、受け入れ先の究極の目標を達成するために使用していくことができれば、と考えている。

2つ目は、私たちインターン生が主催する祇園祭ごみゼロ大作戦ボランティアリーダーの振り返り会である。こちらはごみゼロ大作戦を統括している団体が主催する振り返り会の日程がなかなか決まらず、私たち主催の振り返り会の告知が遅くなってしまい、人が集まらずに中止となってしまった。本当に悔しい思いをしたが、今後イベント企画に携わることがあったら、今回の反省を参考にしていきたいと思う。

このように今回の活動では成果と同時に反省点も多く見つかった。インターンとしての活動はすべて終わってしまったが、今後の個人個人の活動、社会人になってからの経験において今回の学びを生かしていきたいとメンバー全員が強く思っている。

私たちがプロジェクトで、このような成果を出すことができたのは、受け入れ先の公益財団法人京都市環境保全活動推進協会の皆さま、コーディネーターとして見守ってくださった西村雅信先生、大学コンソーシアムの皆さまのおかげです。ご協力いただいた皆さまに心から感謝申し上げます。

以上をプロジェクト報告書として提出させていただきます。